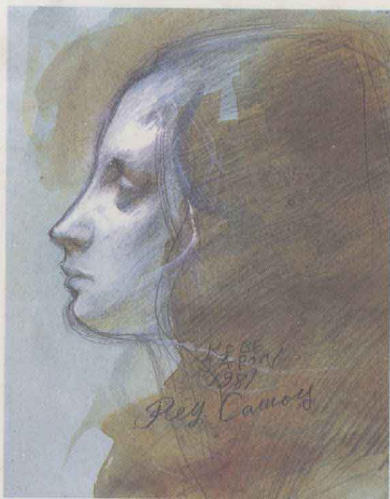


自伝の時間

ひとはなぜ自伝を書くのか



石川美子



中央公論社

自伝の時間

ひとはなぜ自伝を書くのか

石川美子



中央公論社

著者=石川美子 (いしかわ よしこ)

1980年、京都大学文学部卒業。東京大学人文科学研究科博士課程を経て92年にパリ第VII大学で博士号取得。現在、明治学院大学文学部助教授。専攻は、フランス文学。

主要論文に、*La Configuration du Je et du Temps — l'autobiographie et l'autoportrait* (博士論文)、訳書に、モディアノ『サーカスを通る』(集英社)、フェーヴル『ミシュレとルネサンス』(藤原書店)がある。

じでん じかん じでん か
自伝の時間 ひととはなぜ自伝を書くのか

1997年9月25日 初版印刷

1997年10月7日 初版発行

©Yoshiko ISHIKAWA 1997

著者 石川美子

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売部 03-3563-1431

編集部 03-3563-3666

振替 00120-4-34

印刷 三晃印刷

製本 大口製本

ISBN4-12-002731-7 C0095

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

序章 なぜ自伝を？

自伝の歴史 9 自伝とは何か 13 「わたし」の呪縛 17 三つの疑問 21

7

第1章 時間の旅へ

—ロラン・バルトの転身—

「わたしはだれか」25 「わたしはなぜ今ここにいるのか」30
時間に囚われて 34 時間の矢 37

24

第2章 喪のなかで書く

—アウグスティヌスたちの苦しみ—

喪の苦悩 41 時間の虚無のなかに 45 「新たな生」49 生と死の和解 53

40

第3章 詩と散文

—詩人ルボーたちの模索—

詩人と自伝 59 「朝起きるとすぐに」 63 批評か物語か 68
クロノロジ— 71 誰が主人公か？ 74

第4章 日記の魅惑

—ジッドたちの夢—

真実か虚構か 81 回顧のまなざし 84 日記の時間 88 死の
ための日記 91 作品を紡ぎだす 94 「日記を救う」 97

第5章 地下聖堂の闇

—スタール・ドローネー夫人たちの悲劇—

死者たちの地下聖堂 102 喪の破綻 104 革命の混乱のなか
で 110 別れの作品 112

第6章 時間の目まい

—シャトーブリアンの想起—

無意志的想起の幸福 117 リュシルの墓 121 「つぐみのさえ
ずりに……」 125 ルツェルンの湖畔にて 128

116

101

80

58

第7章 写真の真実

—ブルーストたちの発見—

自伝のなかの写真 133 写真から物語を 136 「温室の写真」 142

ゆれる糸杉 145

第8章 時間のかたち

—スタンダールたちの試み—

「わたしは生まれた……」 150 誕生の記述 154 偽られた事

実 157 時間の水門をひらく 161

第9章 歴史学としての自伝

—ミシュレの歩み—

「ルネサンス」を創る 167 美しき墓地 170 妻の死と新たな

愛と 174 人生すなわち歴史学 180 自伝としての『フランス

史』 183

第10章 回心の書

—アウグステイヌスからバルトまで—

ふたつに分かれた本 188 最後の啓示 192 「わたしとは他者

終章 自伝の空間

である」197
ロマネスクの道
200

「わたし」を問う自伝 204
「時間」を問う自伝 209
「わたし」
と「時間」 213
自伝の逆説 218

註 224

引用文献 241

あとがき 250

索引 258

自伝の時間

ひとはなぜ自伝を書くのか

序章 なぜ自伝を？

ひとはなぜ自伝を書くのだろうか。

このような疑問がうかんだのは、ロラン・バルトの作品を読んだときであった。

バルト（一九一五～八〇）は、その多彩な批評活動によって現代の文学や思想にすくなからぬ影響をあたえたフランスの批評家である。一九五〇年代から「エクリチュール」という概念を意識的にもちいて文芸批評界にその言葉を流行させ、六〇年代には文学の記号学を魅力的に実践して、当時の「新批評」の中心的な存在となった。また七〇年代には、読むことの快楽や戯れといった軽やかなテキスト理論を提唱している。そのような批評活動のかたわらで、彼は小説を書きたいという願いを終生もちつづけていた。小説作品を発表することはついになかったが、小説を書くことへの憧憬は年とともにつよまっていたのである。

バルトの批評活動のなかで自伝とのかかわりにおいて重要なのは、一九六八年に発表した論文「作者の死」⁽¹⁾であろう。彼はこのなかで、文学作品における作者の支配性を否定したのである。

それぞれの作品は自立した宇宙をもっており、作品の意味は作者の自我や人生によって説明されるべきではない。文学作品とは作者の「わたし」を語るものではない。こう考えるバルトは、したがって、自伝作品を書いたり解釈したりする活動からはもつとも遠いところに位置しているにちがいがなかった。自伝とは、なによりも作者の「わたし」について物語り、作品の意味を作者の存在そのものへと収斂させてゆく文学だからである。

ところがそのバルトが、数年後に自伝作品を書いたのである。小説への思いをつよめていったなかで晩年に彼が発表したのは、小説ではなく、ふたつの自伝的作品だった。ひとつは自分自身について断片的に語った自伝的エッセー『彼自身によるロラン・バルト』⁽²⁾であり、もうひとつは母の喪のなかで写真について瞑想した自伝的物語『明るい部屋』⁽³⁾であった。小説を書きたいと願ったバルト、そして作品から作者の「わたし」を遠ざけようとしたバルトがいに書いたとすれば、その作品は「わたし」ではなく「彼」や「彼女」を主人公とした三人称小説となるはずではなかったのか。ところが彼が書いたのは、「わたし」による自伝作品であった。しかも、エッセーと物語というふたつの形式をこころみたのである。

こうして疑問がうかんできたのだった。バルトはなぜ自伝作品を書いたのか、と。いやそもそも、ひとはなぜ自伝を書くのだろうか、と。

この「なぜ」には、三つの問いが内包されている。まず第一に、文学とは「わたし」を語るものではないと考えていたバルトが自伝的な作品を書いたとすれば、自伝作品とはかならずしも作者の「わたし」を語るものではないのではないか、という疑問である。第二に、小説を切望して

いた彼が自伝作品を書いたのであれば、小説と自伝とは異なったものだという認識をあらためるべきなのではないか、という疑問である。そして第三に、エッセーと物語というふたつの形式によって彼が自伝作品をこころみたのは、いかなる必然性からであったのか、という疑問である。すなわち、自伝のさまざまな形式のあいだにはいかなる相違点があるのかという点である。

このように考えてみると、自伝とは何かという定義すら、あいまいで漠然としていることに気づく。ひとはなぜ自伝を書くのかと問うまえに、まず、自伝とは何かという輪郭を明らかにして見るべきであろう。

自伝の歴史

自伝文学の歴史は長くて短い。

最初の自伝作品とはいったい何であろうか。このような問いにたいして、じつに多様な答えがかえってくるだろう。もっとも一般的な意見としては、ジャン・ジャック・ルソーの『告白』（一七六四〜七〇年に執筆）とともに近代的自伝の歴史ははじまった、とする説がある。あるいは、聖アウグスティヌスの『告白』（三九七〜四〇〇年に執筆）こそが現在みられるような自伝文学をかたちづかった、という説もひろく支持されている。さらに、カエサル（4）の『ガリア戦記』（紀元前五二年前後に執筆）が最初の政治的自伝だったという説もある。極端な意見としては、古代エジプトの墓碑も一種の自伝だという主張さえみられる。これは極論だとして除外するにしても、

カエサル説を支持するならば、自伝の歴史は二〇〇年以上におよぶことになる。アウグスティヌス説をとれば一六〇〇年であり、ルソー説ではわずか二三〇年ということになる。まさに自伝の歴史は長くて短いのである。

ひとつの文学ジャンルの誕生について、これほど隔たった時期が主張されるというのは尋常ではない。詩や小説などのほかのジャンルでは考えられないことである。おそらくこれも、自伝とは何かという定義が明確にされていないからであろう。

したがって最初の自伝作品が登場した時期を断定することはできない。だが「自伝」という言葉が誕生した時期については、ほぼ明らかにすることができる。『オックスフォード英語辞典』によると、一八〇九年にイギリスで「オート・バイ・オーグライ^{みずからの生}」という語がもちいられたのが最初だという。あるいはもうすこし早く十八世紀末であったという説もあるが、いずれにせよ、一八〇〇年前後に「自^{オート・バイ・オーグライ}伝」という言葉が誕生したことは確かである。それ以前には、自分の生涯について語った作品は「回想録^{メモワール}」とよばれていたのだった。

こうした事実を、ルソーの『告白』とともに自伝の歴史がはじまったとする説を裏づけているようにもみえる。たとえばフランスの自伝研究家フィリップ・ルジュンヌはつぎのようについて、十八世紀後半から、自我の概念が変化しはじめた。自己の歴史を語り、出版しようとするという新しい現象があらわれ、ヨーロッパ諸国でつぎつぎとそのような作品が書かれるようになった。新しい意識から生まれた作品群をあらわすには「回想録」という既存の言葉では不充分であり、

したがって「自伝」という新しい言葉が必要だったのである。⁽⁶⁾と。

そのような「自伝」としてルジュンヌがあげるのは、まずルソーの『告白』や、イギリスの歴史家ギボンの『回想録』（一七八八〜九三年執筆）、そしてアメリカのフランクリンの『回想録』（一七七一〜九〇年執筆）などであった。このなかで執筆時期がもっとも早かったのはルソーであり、しかも彼だけが生前にみずからの手で自伝を発表しようと望んでいた——結局は朗読会をひらくだけに終わってしまった、刊行は死後の一七八二年になったのであるが——。これらの理由からルジュンヌは、ルソーの『告白』とともに自伝の歴史ははじまったと考え、それ以前は自伝の前史にすぎなかったと主張するのである。

自伝の前史に属する「回想録」と、新しい「自伝」とは、どのように異なるのだろうか。その相違について、フランスの『十九世紀大百科事典』（一八六六年刊行）の「自^{オトコトワライ}伝」の項目は、つぎのように説明している。自分の生涯について語った作品のなかでも、当時の事件や歴史に主眼がおかれているものは回想録とよばれ、事件よりも自分自身をえがきだそうとするものは自伝とよばれるべきである、と。ルジュンヌもおなじように述べる。回想録の作者は自分の時代の歴史を書こうとするが、自伝においては自分の生の歴史をえがこうとする、⁽⁸⁾と。（もちろんこれは、題名ではなく内容の問題である。題名にかんして言うならば、ルソー以後の十九世紀になっても、そして現在においてもなお、「回想録」という題名をつけた自伝はしばしばみられる。むしろフランスにおいては、「自伝」という語を題名とする作品はほとんどみあたらないと言っていい。その点については、終章で述べる。）

ルジュンヌの論理にしたがうと、ルソーの『告白』とともに自伝の歴史ははじまったのであるから、それ以前の作品はどれも歴史的な事件を中心に語った回想録にすぎない、ということになってしまふ。それでは、アウグスティヌスの『告白』はどうなるのか。この作品は、キリスト教への回心にいたる自己の生を語つたものであり、しかも彼はそれを人びとに読んでもらうために書いたのであるから、内容的には「自伝」そのものである。けつして回想録とよびうるものではない。しかし作品が書かれたのは、ルソーよりも一四〇〇年近くもさかのぼつた自伝前史の時代である。したがつてアウグスティヌスの『告白』は自伝であつて自伝ではない、ということになつてしまふ。奇妙な袋小路である。これは前提そのものに欠陥があるからにちがいない。

アウグスティヌスの作品とルソーの作品とを、性質のまったく異なつたものとして分かつたねばならないこと自体が奇妙だといえるだろう。というのは、ルソーの『告白』が刊行された時代はその影響をうけて自伝を書いた人たちは、新しいジャンルの誕生どころか、脈々とつづく伝統的なジャンルのなかでルソーの作品をとらえていたからである。たとえば一七八八年に回想録を書きはじめたギボン⁽⁹⁾は、その序文において「聖アウグスティヌスやルソーの告白録は人間の内心の秘密をさらけだすものである」としてゐる。またレチフ・ド・ラ・ブルトンヌもその自伝『ムッシュー・ニコラ』(一七八三〜九六年執筆)の序文のなかでこう書いていた。「ひとりの人間の歴史をえがくという」わたしのころみには、ふたつのモデルがある。ヒッポの司教「アウグスティヌス」の『告白』とジュネーヴ市民「ルソー」の『告白』である⁽¹⁰⁾と。

このようにかつての自伝作者たちは、アウグスティヌスとルソーをおなじひとつの流れのなかでとらえていたのだった。ところがあるとき、ルソーの作品によって歴史の流れを分断し、ルソーから自伝の歴史ははじまったと断言せねばならなくなった。その結果としてアウグスティヌスの作品は、真の自伝の歴史から除外されることになる。そのことを受け入れられない人たちにしても、すくなくともルソーから近代、自伝の歴史ははじまったという点だけはみとめざるをえなくなった。このような状況におちいってしまった事情について、もうすこし詳細に検討してみるべきであろう。そして「自伝」とは何かについて考えてみなければならぬ。

自伝とは何か

自伝文学の歴史よりもいっそう困惑させられるのは、自伝研究の歴史かもしれない。すでにみたように、「自伝」という言葉が誕生したのは一八〇〇年前後のことであった。ところが、それから一七〇年が経過した一九七〇年代まで、自伝というジャンルを系統的に研究しようとする動きはほとんどみられなかったのである。

一九七四年に出された『日本人の自伝』⁽¹⁾のなかで佐伯彰一は、日本には総体的に自伝をとらえようとする研究がみられないと嘆いている。それは日本にかぎったことではなかった。欧米の文学界においても同様であった。総合的な研究としては、イギリスのロイ・パスカルによる『自伝における意匠と真理』(一九六〇年)くらいしか見るべきものはなかったのである。だからアメリ

カの研究スベンジマンは、一九八〇年に『自伝のかたち』を刊行した際につきのようにするさねばならなかった。もしこの刊行が五年前であったならば、自伝文学が学問的に無視されている実情を嘆くことで本書をはじめねばならなかっただろう、と。すなわち英米圏においても、一九七五年時点では本格的な自伝研究はみられなかったということになる。そしてフランスの研究者フィリップ・ルジュンヌもまた、最近になってこう回想している。自分が自伝に関心をもちはじめたのは一九六九年のことだったが、その当時は、総体的な自伝研究としてはジョルジュ・ギユスドルフの短い論文「自伝の条件と限界」(一九五六年)くらいしか存在していなかった、と。

このような状況において自伝研究をはじめたルジュンヌは、まず自伝とは何かを明らかにすることから始めねばならないと考えた。そして一九七一年の『フランスの自伝』において自伝の定義をこころみ、一九七五年の『自伝契約』で定義に修正をほどこして、つぎのように完成したのである。

「自伝とは」 実在の人物が、自分自身の存在について散文中で回顧的に書いた物語であり、自分の個人的な生涯、とりわけ自己の歴史に主眼をおいているものである。⁽¹⁴⁾

さらにルジュンヌはこれを要素ごとに整理している。

(1) 形式——物語をなしていること。

散文中で書かれていること。

(2) 主題——個人の生涯、自己の歴史についてであること。